

使徒の働き16章11－15節 「欧洲宣教の初穂」

1A マケドニアへの旅 11－12

1B 速やかな航行 11

2B ピリピでの滞在 12

1C 地方都市

2C 植民都市

2A リディアの家の回心 13－15

1B 川岸での祈り場 13

2B 神を敬うティアティラ人 14

1C 神を敬う人

2C 主が開かれた心

3B 一家のバプテスマ 15

本文

使徒の働き 16 章を開いてください。私たちは、前回、16 章の 10 節まで読みました。今晚は、11 節から 15 節までを、じっくり見ていきたいと思います。思い出していただきたいのは、パウロの一行がアジアでの宣教を広げようと思った時に、御靈がそれを禁じたことです。そして、選択肢がなくなり、エーゲ海に面するトロアスの町に行った時に、夢で、マケドニア人が、渡って来て助けてくださいと、強く懇願していました。それを見て、神が彼らに福音を宣べ伝えるように、自分たちを召しているのだと確信したのです。

マケドニアというのは、今のギリシャの北部一帯にありました。ここでついに、アジアから欧洲に大陸を変えて宣教することになります。見てのとおり、歴史の中でキリスト教の広がりは、欧洲になります。大航海時代にポルトガルやスペインなどが世界にカトリックの宣教師が布教を初め、そしてプロテstantは英國の大航海時代に世界に宣教をしました。そして、私たちが福音を聞き、信じています。その始まりが、トロアスからマケドニアに行った航行だということです。そうやって導かれていく、初めの町がピリピになります。

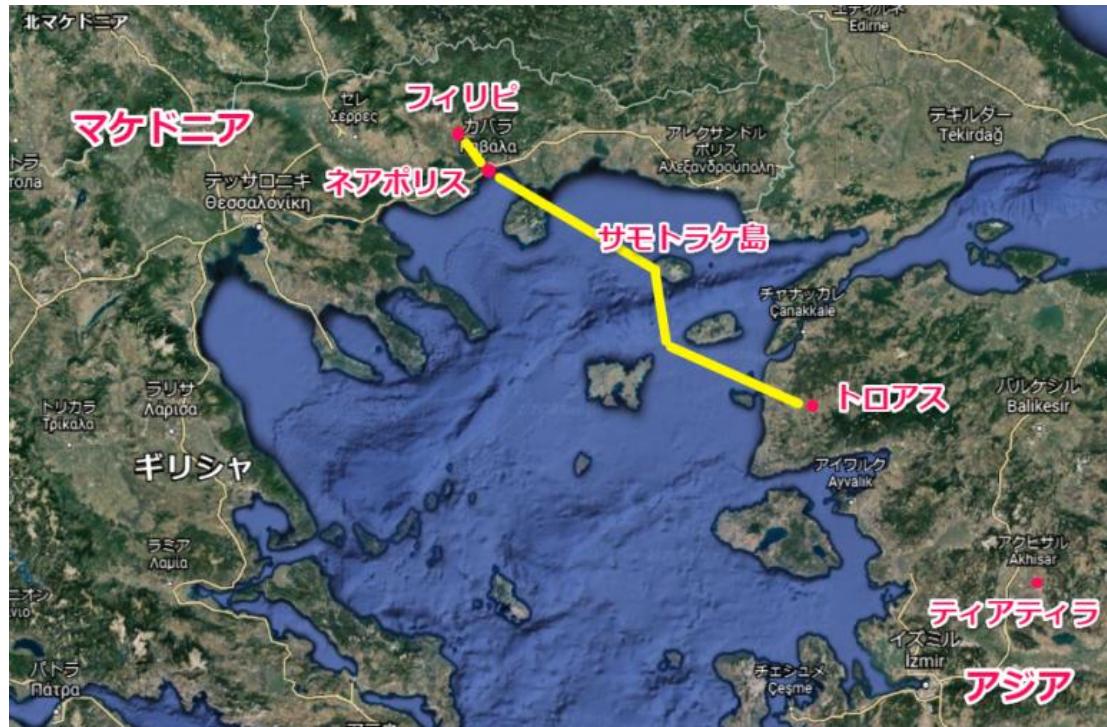
1A マケドニアへの旅 11－12

1B 速やかな航行 11

¹¹ 私たちはトロアスから船出して、サモトラケに直航し、翌日ネアポリスに着いた。

パウロの宣教の旅の地図をぜひ見てください。トロアスから、サモトラケという島には 130 キロもあります。そこからさらに、ネアポリスは、130 キロ以上の航行です。これを、「翌日」と言っていますか

ら、たった二日間で渡り切ったということになります。使徒の働き 20 章 6 節には、ピリピからトロアスまで 5 日かかったと言っています。ですから、主は、順風によって彼らを速やかにマケドニアのほうに連れて行かれました。



「ネアポリス」は、マケドニアの都市ピリピの玄関口の港として使われていました。私たちが2018年に旅をした時は、トロイに近いホテルを朝に出て、バスでトルコからギリシャに越境し、次の日にネアポリスに到着し、そこのホテルに宿泊しました。今は、カヴァラと呼ばれる港町です。ホテルは港の目の前にありました。当時の港とは多少ずれているでしょうが、それでも、パウロたちの船がここに着岸したのだと思い、感慨深くなりました。

ここで思われるることは、今は、いろいろな国に分かれ、越境する時は必ず出入国の手続きを取らなければいけませんが、当時はすべてローマ帝国の中にあった、ということです。私たちが旅をした時、陸路でトルコからギリシャに行きましたが、当時はそのまま船出して、ネアポリスに着岸して、それで終わりです。イスラエルも同じです。弟子たちが、イスラエルから、シリアのアンティオキアに行ったのですが、今であれば、イスラエルからレバノンは絶対に越境できません。敵対関係にあるからです。そしてレバノンからシリアに入らなければいけませんが、シリアもイスラエルと敵対関係があるので、イスラエルにいたことが分かれば、入国を許されません。そして今は、アンティオキアはトルコにあるので、トルコに入国手続きをします。

けれども、当時は同じローマ帝国であり、このような障壁は何一つありませんでした。分かりやす

¹ <https://hamamatsu-church.org/%E3%81%9D%E3%81%AE%E5%A4%A2%E3%80%81%E7%A5%9E%E3%81%8C%E6%88%90%E3%81%97%E9%81%82%E3%81%92%E3%82%8B/>

く言うと、日本から韓国に渡り、韓国から北朝鮮に、北朝鮮から中国またロシアに行くようなものです。船で韓国に入れば、あとは同じ街道を歩いて、そのまま中国やロシアに行けていました。しかも、同じ言語、同じ通貨です。どれほど効率が良かったかしれませんね。

ダニエル書には、ローマについての幻を、ネブカドネツアル王も見たし、ダニエル自身も見ました。ネブカドネツアルの見たのは、人の像における鉄の脚です。ダニエルは、頭に十本の角があり、鉄の牙を持っているおぞましい獣でした。ローマは事実、強権的で、霸権的な帝国です。既存の諸国民をことごとく制圧し、蹂躪させました。それで出来上がった定刻なのです。主は、この時にご自身の選ばれた者、メシアを遣わされました。もしローマ帝国でなければ、パウロたちの宣教の旅は、そんなに迅速に到底、できなかつたでしょう。そもそも不可能だったでしょう。ですから、神は、悪をも用いて、相働かせて善としてくださるという、ロマ8章28節にある約束はその通りなのです。



もっと具体的に話しますと、「ネアポリス」は、エグナティア街道という幹線道路の東の始点になっていました。ネアポリスから出て、ギリシャ半島の反対側、イタリアに面するアドリア海まで、まっすぐに走っていました。後に、ネアポリスから東側にも建設されて、ビザンチウム、後のコンスタンチ

² Eric Gaba (Sting - fr:Sting) - Own work; For the source of data and the modern name of the cities, see the discussion page, CC 表示-継承 2.5, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=856541> による

ノープル、すなわち、イスタンブールにまで延伸しました。相当、長い街道ですが、まさに、「すべての道はローマに通ず」なのです。ローマ街道は、今でも農道に使われているのです。二千年を経ているのに、信じられないほど整備されています。

2B ピリピでの滞在 12

¹² そこからピリピに行った。この町はマケドニアのこの地方の主要な町で、植民都市であった。私たちはこの町に数日滞在した。

1C 地方都市

エグナティア街道は、ネアポリスからピリピへと向かっています。バスで行きますと、一気に坂道を上がり、それからすぐに平坦になります。パウロたちが、なぜピリピに行ったかは、第一に、「この地方の主要な町」ということです。

ピリピという名前は、アレクサンドロス大王の父、マケドニア王国の王、ピリッポス二世から来ています。かねてから、金鉱が近くにあったので、金によって栄えた町でした。後に、紀元前 42 年、ローマ共和国での内戦がありました。ブルトゥスとカシウスが、アントニウスとオクタウニアヌと戦ったのです。ブルトゥスは、ユリウス・カエサルを暗殺した人物で、「ブルータス、お前もか」というセリフで有名な人です。ブルトゥスとカシウスが敗れました。その後、アントニウスとオクタウニアヌが対決し、後者が勝利しました。オクタウニアヌがアウグストゥスと名を変え、ローマ帝国の初代皇帝となるのです。その時にイエスがマリアから生まれます。

パウロの宣教は、新たな地方に行けば、まずその中心のところに行こうとします。前回は、アジアに行こうとし、またビティニアに行こうとしました。もっともその時は御靈に禁じられました。けれども、マケドニアに導かれた時も、そこでの主要な町に向かいました。そこを拠点として周囲に、福音が広がり、諸教会が建てられることを願っていました。

2C 植民都市

そして、ルカは、ピリピが「植民都市であった」と言っています。ここが大事なところです。ローマ帝国において、植民都市と言えば、「ローマの民が植えられた都市」ということになります。先ほど、すべてに境がなくなり、街道が走り、通貨が一つになった、今でいうグローバル化が進んだ状態になっています。しかし、それはあくまでもローマが武力で諸外国を制圧した結果です。これを、「パクス・ロマーナ」と呼びます。力による平和です。

そこで、広大なローマ帝国で反乱などの騒乱が起こらないように、軍事上の拠点となるような都市を置きました。ローマの退役軍人が多く住みました。全員にローマ市民権が与えられ、免税特権も与えられていました。いわば、「ローマのモデル都市」です。他にも、ピシディアのアンティオキ

ア、リステラ、トロアスも、そしてこれから出てくるコリントも植民都市でした。けれども、ルカは、ピリピの町のみを敢えて植民都市であると言及しています。それは、これからのパウロの、ピリピにおける宣教に、植民都市であることが深く関係してくるからです。

パウロの一行は、ピリピに到着して数日を過ごしましたが、その間に、いろいろピリピの中を調べていったことでしょう。

2A リディアの家の回心 13-15

1B 川岸での祈り場 13

¹³ そして安息日に、私たちは町の門の外に出て、祈り場があると思われた川岸に行き、そこに腰を下ろして、集まって来た女たちに話をした。

ピリピは、非常に大きな都市でした。けれども、宣教において多くの人に伝えられたかというと、必ずしもそうではありません。安息日に、シナゴーグ、すなわちユダヤ教の会堂に行くのではなくて、祈り場に行っています。それは、ユダヤ教で、町の中に成年の男性が十名以上でなければ、会堂が建てられないからです。

これまで見てきて、当時のパウロたちの宣教が、何か、日本の大都市における宣教に重なっていることに気づきませんか？東京は、とてつもない巨大な都市です。25年で 1400 万人以上います。それに対して、キリスト者は 80 数万人です。0.6%ぐらいでしょうか。

ところでパウロたちが、新しい宣教地に行って、シナゴーグに行くのは、それがイエスご自身の宣教であり、神のみこころであったからです。主は、まず失われたイスラエルの羊を救うために来られました。パウロが、ロマ 1 章 16 節で、「福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です」と言いました。すべての人が救われるための福音ですが、伝えるのは、初めにユダヤ人だったのです。けれども、彼らが受け入れず、福音が異邦人に伝えられているという順番になっています。

そして、ユダヤ人は、「神のことばを委ねられた(3:1)」と言っています。福音は、すべて聖書の約束によるものです。聖書でアブラハムに祝福を約束され、その子孫によってすべての諸民族が祝福されます。そしてアブラハムの子孫として生まれたダビデに、神が永遠の御国の約束を下さり、ダビデの世継ぎの子が、御国の王となると言われました。そのキリストの約束が成就したのは、イエスであると宣べ伝えることができます。事実、この方を神はよみがえらせ、確かにキリストであり、神の御子であることが、明らかにされました。イエスが、律法と預言の成就であると宣べ伝えることが、聖書を知っている人であれば容易だったからです。

このようなことを思うと、私は、イエス・キリストの福音を伝える時に、まず、聖書に何が書かれているのかを平たく、伝えていくのは大切ではないか？と思っています。それからでも、この方を信じる決心をしても遅くないと感じています。もちろん、すぐに信じることは幸いです。しかし、まだ何か分からぬという、大きな課題があります。まず、聖書にある神の働きやお姿を知っていただき、それからイエスが唯一の主、救い主であることを信じることをお勧めします。

話を戻して、シナゴーグが建てられないほどユダヤ人が少なかったのですが、それは、ピリピがローマの植民都市であったことに無関係ではありません。パウロとシラスが後で捕らえられますが、反ユダヤ的な発言をしています。「16:20b-21 この者たちはユダヤ人で、私たちの町をかき乱し、21 ローマ人である私たちが、受け入れることも行うことも許されていない風習を宣伝しております。」ローマへの帰属心が非常に強く、ユダヤ人であることが風紀を乱していると訴えたのです。これでは、ユダヤ教の生活を送ることは難しくなります。それで少なかったのでしょうか。

そして、「祈り場があると思われた川岸」とありますが、水の洗いの儀式がユダヤ教にはあります。その水は、いのちを示す、動いている水でなければいけません。ですから川は絶好の水です。それで、川岸に集まっていました。今も、ピリピの遺跡のすぐそばに、クレニデス川が流れています。そこに、ギリシャ正教会の洗礼場があります。確かに城壁から少し離れており、町の外にあつたことがわかります。

「そこに腰を下ろして」とありますが、ユダヤ教のラビは、教える時は腰を下ろします。イエスも弟子たちに教えられる時に座って教えていましたね。そして、「集まって来た女たちに話をした」とあります。ギリシア・ローマの社会では、女性の地位と尊厳は極めて低いです。奴隸より、ましなぐらいです。しかし、神のかたちとして女もユダヤ教では尊ばれていました。ですから、異邦人の女性たちの中で、改宗までせずとも神を敬う人々が多くいました。そして、イエスご自身はさらに、女を尊ばれました。福音書には、女が主に用いられる姿が多く出てきますね。マグダラのマリアは、十字架のそばにいて、また復活の第一目撃者の一人です。

2B 神を敬うティアティラ人 14

¹⁴ リディアという名の女の人が聞いていた。ティアティラ市の紫布の商人で、神を敬う人であった。主は彼女の心を開いて、パウロの語ることに心を留めるようにされた。

1C 神を敬う人

リディアが主のことばに心を留めました。彼女が、神を敬う人、すなわち異邦人だけれども、イスラエルの神に望みを置いていました。そして、「ティアティラ市の紫布の商人」とあります。ティアティラは、黙示録の七つの教会に出てくる町の一つです。いろいろな商業が発達して、染色業も有名でした。ですので、そこで女預言者イザベルが、教会のかしらたちと淫行をしているというのは、同

業者における忌まわしい慣わしが背景にあります。どんちゃん騒ぎで、異教の儀式と性的な乱れがあったのです。それを由として教えていたのが、預言者イゼベルでした。

紫布は高級貴人や王族が着るものです。ムラサキガイなどから出る紫の色素が取り出されて、染料にしており、きわめて貴重でした。大祭司の装束、エポデにも、紫の撚り糸が使われていたので、極めて貴重で、高価でした。彼女が、かなり商才のある人だったでしょう。

2C 主が開かれた心

そして、ここでルカは、彼女はパウロの語ることに心を留めたのですが、それは、「主は彼女の心を開くようにされたからだ、と言っています。ここに、信じるか信じないかには、心を開くかそうでないかには、神の主権があることがはっきりと分かります。他にも女性が複数名いたはずです。その中で、リディアだけが心を開いたのです。

私たちは神の真理を語りますが、主が、心を開かれるのです。パウロが第二コリント4章で、福音が語られているのに、信じない人は、覆いがかかるとして、この世の神が彼らの思いを暗くしていると教えています。そして、信じる人は、神が照らしてくださるからだと言っています。「Ⅱコリ4:6 「闇の中から光が輝き出よ」と言われた神が、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせるために、私たちの心を照らしてくださったのです。」

3B 一家のバプテスマ 15

¹⁵ そして、彼女とその家族の者たちがバプテスマを受けたとき、彼女は「私が主を信じる者だとお思いでしたら、私の家に来てお泊まりください」と懇願し、無理やり私たちにそうさせた。

リディアが、欧洲における初穂となりました。バプテスマを受けましたが、その時に彼女の家族の者たちも受けました。後に回心する看守も、その一家がバプテスマを受けますね。世界の宣教において、個人だけでなく、その時に家族が回心すること、また部族全体が回心することがあります。それは、信じてもいないのに、その共同体の長が信じたから、形だけでバプテスマを受けた、という形式的なことではありません。自分も同意して、信じています。それは、自分というものを、その部族の一部のようにみなしているからです。

聖書の時の人々は、キリスト教の歴史がある欧米よりも、むしろ非欧米のほうが文化的には似ています。人々を、個々人で見るのではなく、家や部族、民族の単位で見ることです。実に、アダムの犯した罪が、すべての人が罪を犯したようにされたのです。アダムがいわば人類という部族の長で、私たちもその中に入れられています。同じように、キリストをかしらとする部族、キリスト部族と呼んだらようでしょうか、この方の行われた正しいことで、キリストにつく者たちみなが、正しいと恵みによってみなされます。そしてイスラエルでは、例えばヨシuaは、「私と私の家は、主に仕

える(ヨシュア 24:15)」と言いました。

そして、リディアの強い要望がすごいですね。「私が主を信じる者だとお思いでしたら、私の家に来てお泊まりください」と言っています。ローマ社会には宿はありますが、お世辞にも快適な環境ではありませんでした。ですから、旅人はもてなす習慣があります。ここでパウロの一行が断つたら、彼女を信じていない者と思っているということになってしまいます。パウロとシラスだけでなく、ルカなど他の人もいましたから、大きな家だったのでしょう。

彼女の強い求道の思い、信仰を持ったけれども、主をもっと知りたい、みことばを聞きたいという思いが反映しています。似たような話で、エマオへ行く途上で二人の弟子が、イエス様が聖書全体からキリストを説き明かしていた時に、無理やり自分と同じ所に泊まらせました。

エルサレムでは、マルコの母マリアの家が信者たちの集まる所で、祈る所となっていました。リディアがピリピに持っていた家も、ピリピにいる信者たちが集まる所、教会となっていくことが最後の部分を読むと分かります。「16:40 牢を出た二人はリディアの家に行った。そして兄弟たちに会い、彼らを励ましてから立ち去った。」リディアの家が教会として生まれていきました。

こうして見ると、あの夢、マケドニアの人が助けてくれ！と言って、懇願したのが、これだったというわけです。夢の中では男性でした。しかし、ここでは女性です。そして、夢から想像、期待できたのは、マケドニアで大ぜいの人々が一気に救われるとか、大規模なリバイバルのようなものだったでしょう。しかし、そうではありませんでした。

むしろ、そこにあるのは御靈による導きです。そして、信仰により、しっかりと踏み出すことです。少ない人数でも、忠実に語ることです。そして、語れるような空気がない、圧迫があっても、それでも大胆に語ることです。